

『三国志』に関しては様々な分野からのすぐれた研究成果があるが、特に一九九〇年代以降、三国志学会の事務局長である渡邊義浩先生による「名士」論からの研究（この視点は、ブルデューの文化資本論にヒントを得ているとのことである）や石井仁先生による都督制をはじめとする軍制の研究など、数多くの業績が積み重ねられてきている。

これらの先行研究を踏まえつつ、筆者は一九九〇年代後半から多様な時間軸・空間軸に基づく様々な視点を組み合わせた中国・三国時代研究に意を注いできた。時系列をこれまで以上に網羅的に整理した上での三国などの諸政権相互の政治関係の歴史を軸として、シルクロードなどの交通路や非漢族と三国との関係、当時の仏教・道教などの宗教勢力、さらには気候や人口・災害などに関する研究や出土した木簡・竹簡の分析に基づく社会学的研究などの成果を踏まえ、ある時は全地球的な時間軸・空間軸から俯瞰しつつ、またある時は時間的・空間的にミクロな問題を掘り下げ、それらを総合して中国・三国時代の全体像を示すこ

「グローバル・『三国志』」

満田 剛

とが重要だと考えたためである。そして、その成果が拙著『三国志―正史と小説の狭間』（白帝社二〇〇六年）となって、ひとまず結実した。

昨今の歴史学の世界では、従来の一国史の枠組みをこえて、様々な時間軸・空間軸を持つ広域の地域や国際秩序などを考察対象とするグローバル・ヒストリー研究が注目されている。魏・蜀漢・呉という三国が存在していた時間・空間だけで完結させず、多角的な視点からの分析と総合を目指すという私の方向性は、一面的にはこのグローバル・ヒストリー研究から影響を受けている。とすれば、私が目指しているのは、グローバル・ヒストリーならぬ「グローバル・『三国志』」とでも言うべきものになるだろうか。

個人的な今後の課題として、ライフワークである歴史書『三国志』の史学史的研究に取り組みつつ、後漢末の地方政権や非漢族、仏教などについてさらに研究を深め、当時の「周縁」からこの時代の歴史をとらえ直していきたいと考えている。

（みつだ たかし／東洋哲学研究所委嘱研究員）